

論文

## 知的障害者の一般就労における環境設定の実態と課題

### —卒業生への合理的配慮の提供を目指して—

The Actual Conditions and Challenges of Working Environment for Persons with Intellectual Disabilities  
- Aiming at Providing Reasonable Accommodation

矢野川祥典 (高知大学教育学部附属特別支援学校)<sup>1</sup>

是永かな子 (高知大学教育学部・高知発達障害研究プロジェクト・高知ギルバーク発達神経精神医学センター)<sup>2</sup>

YANOYAWA Yoshinori <sup>1</sup>, KORENAGA Kanako <sup>2</sup>

*1, School of Special Needs Education Attached to Faculty of Education, Kochi University*

*2, Faculty of Education, Kochi University · The Research Project on Kochi Developmental Disabilities · Kochi Gillberg  
Neuropsychiatry Centre*

#### ABSTRACT

In this study, we analyzed the actual conditions and challenges of working environment for persons with intellectual disabilities. In conclusion, although most of workers have certain attachments to their work, they felt a lack of communications with colleagues and superiors in the workplace. Even on business conduct, they want to tell them in an easy-to-understand way. Workers who graduated special school for students with intellectual disabilities needs more adapted environment is important to draw better career designs.

## 1. 研究の目的

近年、障害者の就労支援について関心が高まる中、2014年に障害者権利条約が我が国で批准、締結された。これにより障害者の差別禁止や社会参加への期待が高まるとともに、教育や労働等の分野において合理的配慮に対する理解と推進が求められている。

A 知的障害特別支援学校では、校内研究等により合理的配慮に関する勉強会を定期的に開催する等、児童生徒に対する学習活動の在り方を見つめ直し、支援と配慮の質を高めるための整備を徐々に進めている。小学部から高等部までの系統性のある職業教育の在り方を検討することで、児童生徒がよりよいキャリアデザインを描いていけるような支援方法を確立していきたいと考えているのである。

また、A 知的障害特別支援学校ではこれまでの実績として、職業教育及び進路指導の充実を図り、卒業生の高い一般就労率に繋げている。しかし、B 県内の他の知的障害特別支援学校を併せた就労継続状況の把握は十分とはいええず、就労者は職場に対してどのような悩みや要望を持ち、困り感を抱えているのか、詳細は明らかでない。

そこで本研究では、青年学級（毎月開催の同窓会行事）に参加した 10 代～50 代の A 知的障害特別支援学校卒業生に対して聞き取り調査を行い、職場への要望や悩み等を明らかにした。就労継続を図るため、今後、職場に対して環境設定の充実を訴え、就労者へのいっそうの配慮と支援を求めることが重要と考えている。障害者就労支援のための新たな概念である合理的配慮の観点をもつ、学校の就労移行支援、アフターケアとしてどのような支援方法を考え、提供していくことができるのか考察するとともに、職場に対する理解と啓発を進めるための手がかりとする。また、卒業生の悩みや要望、困り感の把握を通して、在学に対する教育活動や支援方法、保護者への啓発や支援へと還元し、関係機関との共通認識や連携強化につなげることを目指す。

## 2. 研究の方法

本研究では調査研究の方法を用い、質問項目を提示して面接式、聞き取り調査を実施した。調査対象は、A 知的障害特別支援学校卒業生の 30 人を対象とした。調査期間は

2013 年 12 月から 2015 年 8 月の期間とした。調査項目は、厚生労働省(2008)「障害者雇用実態調査」に基づき、作成した。

本研究では調査内容のうち、第 1 に対象者の年齢構成、第 2 に勤務年数、第 3 に対象者就労先の産業分類、第 4 に就労する際の相談相手、第 5 に職場への要望、第 6 に悩みや要望、困り感の内容、第 7 に職場での悩みや困り事の相談相手、第 8 に仕事の楽しさの有無、第 9 に楽しいと感じる時、第 10 に将来の不安や心配について、それぞれ調査結果を示した。割合（％）は、小数点第 2 位を四捨五入して示した。

## 3. 結果

### 3.1 年齢構成

まず、表 1 で調査対象者の年齢構成について示す。なお、対象者の年齢は、調査時の年齢で示すこととする。

表 1 年齢構成（年齢は～歳以下で表記：対象者 30 人）

年齢	18～20	21～25	26～30	31～35
人数	3	11	6	6
割合	10.0%	36.7%	20.0%	20.0%

36～40	41～45	46～50	51～55	56～60
1	1		1	1
3.3%	3.3%		3.3%	3.3%

今回の調査では、21～25 歳以下の対象者が 11 人と最も多く、次いで 26～30 歳以下と 31～35 歳以下が 6 人となっている。この他、少人数ではあるが、18 歳から 60 歳まで各年代の調査を実施している。

### 3.2 勤務年数

次に、勤務年数を 5 年毎に集計し、表 2 で示す。

表 2 勤務年数（※年数は～年目）

年数	1～5 年	6～10 年	11～15 年	16～20 年
人数	9	12	3	3
割合	30.0%	40.0%	10.0%	10.0%

21～25年	26～30年	31～35年
	1	2
	3.3%	6.7%

今回、調査した対象者については、勤務年数6～10年目及び1～5年目の比較的若い世代が中心の構成となっている。これは、青年学級（A知的障害特別支援学校卒業生を対象とした同窓会）に集まる卒業生の年齢層が、比較的若い世代であることも反映している。ただし、本人都合や企業の事情等により、離職経験のあるA知的障害特別支援学校卒業生も多数含まれている。

### 3.3 産業分類

次に、調査回答者が所属する企業や法人について、表3で産業分類別に示す。

表3 産業分類（日本標準産業分類：総務省）

産業	農業	製造業	卸売・小売業	複合サービス業
人数	1	11	3	1
割合	3.3%	36.7%	10.0%	3.3%

サービス業	公務	建設業	医療、福祉
7	4	1	2
23.3%	13.3%	3.3%	6.7%

製造業が最も多く、次いでサービス業、公務、卸売・小売業等の企業に所属している。ただし、今回の産業分類数値は、卒業生の一般就労者全員における産業分類割合ではないことを記しておく。

### 3.4 就職する際の相談相手

次に、就職する際の相談相手について、表4で示す。

表4 就職する際の相談相手（複数回答可：各回答人数を回答者30人で割って計算）

項目	人数	割合
①家族	17	56.7%
②学校の先生	29	96.7%
③公共職業安定所	7	23.3%
④障害者職業センター	7	23.3%
⑤福祉事業所	1	3.3%
⑥就業・生活支援センター		
⑦通勤寮・グループホーム		
⑧知り合い・友だち	3	10.0%

②「学校の先生」が最も多く、次いで①「家族」、③「公共職業安定所（ハローワーク）の職員」、④「障害者職業センターの職員（ジョブコーチなど）」と続いている。ハローワークと障害者職業センターについては、学校卒業後すぐに一般就労をする際に、必ず連携を図る窓口であり支援者であるため、このような結果となっている。

また、高知県及びA知的障害特別支援学校の特徴として、最近まで就業・生活支援センターの数が少なく、卒業生の利用自体がこれまでは少なかったことや、A知的障害特別支援学校生徒は全員が通学生なので、福祉事業所や通勤寮・グループホーム等との連携が、他の学校と比較した場合少ないことも、就職する際の相談相手に反映している。

### 3.5 職場への要望

次に、職場への要望について、表5で示す。

表5 職場への要望（複数回答可：各回答人数を回答者30人で割って計算）

項目	人数	割合
①今の仕事をずっと続けたい	24	80.0%
②ほかの仕事もしてみたい	4	13.3%
③困った時に相談できる人がほしい	9	30.0%
④一緒に働く仲間、友だちがほしい	12	40.0%
⑤休みを増やしてほしい	6	20.0%
⑥仕事ができるように教えてほしい	10	33.3%
⑦働く時間や日を増やしてほしい	3	10.0%
⑧まわりの人に仕事を助けてほしい	10	33.3%

⑨給料を増やしてほしい	8	26.7%
-------------	---	-------

①「今の仕事をずっと続けたい」が最も多く、次いで、④「一緒に働く仲間、友だちがほしい」、⑥「仕事ができるように教えてほしい」、⑧「まわりの人に仕事をたすけてほしい」、③「職場で困った時に相談できる人がほしい」といった各項目について、多くの卒業生が挙げている。

これらから、卒業生のほとんどが現在の仕事を続けたいと願ってはいるが、業務を遂行するうえで悩みや要望、困り感を少なからず抱えていることが分かる。

### 3.6 悩みや要望、困り感の内容

次に、これら悩みや要望、困り感について、自由記述でたずねた。その結果を、表6で示す。

表6 悩みや要望、困り感の内容(自由記述 回答者13人)

悩みや要望、困り感の内容 ※ ()内は主な業務内容
・コミュニケーションがうまく取れない。話が苦手。 (高齢者施設での掃除)
・話し相手がほしい。(食品製造の補助作業)
・仕事を教えてほしい。話しやすい人がいてほしい。 (公務、主に農作物手入れ)
・仕事を教えてほしい。話し相手がほしい。 (農作物栽培の補助作業)
・相談できる友達がほしい。(主に清掃業務)
・自分に自信が持てない。(食品製造)
・仕事で分からないことがある。 (飲食物製造に関する作業)
・職場の友だちがほしい。(運送業の荷物整理)
・もっと友達がほしい。(農作物製造関連)
・いろいろ洗うから、少し分からないことがある。 (洗濯業務)
・いろいろな種類の野菜のはかり方が難しい。 (高齢者施設での調理補助)
・仕事で人が足りないので、もっと人がほしい。 (産業廃棄物処理)
・もっとレベルの高い仕事がしたい。 (おしぼりの製品点検、コンテナ詰)

自由記述の回答を見ると、「話し相手が欲しい」、「仕事を教えてほしい」等に関連する記述が多くみられ、表5の結果と併せ、卒業生の悩みや要望、困り感が浮き彫りになっている。

### 3.7 職場での悩みや困り事の相談相手

次に、職場での悩みや困った時の相談相手について、表7で示す。

表7 職場での悩みや困り事の相談相手(複数回答可:各回答人数を回答者30人で割って計算)

項目	人数	割合
①職場の上司	16	53.3%
②職場で一緒に働いている人	19	63.3%
③家族	11	36.7%
④通勤寮・グループホームの職員	2	6.7%
⑤障害者職業センターの職員	5	16.7%
⑥就業・生活支援センターの職員		
⑦学校の先生	9	30.0%
⑧公共職業安定所の職員	3	10.0%
⑨職場以外の友だち	1	3.4%
⑩病院の先生や職員		
⑪特にいない	5	16.7%

②「職場で一緒に働いている人」が最も多く、次いで①「職場の上司」、③「家族」と続き、職場や家族以外では、⑧「学校の先生」、⑥「障害者職業センターの職員(ジョブコーチなど)」、⑧「公共職業安定所(ハローワーク)の職員」と続く。表4でも触れたように、高知県及びA知的障害特別支援学校の進路事情として「就業・生活支援センター」との連携は、他県と比べ年数が浅く、卒業生の相談窓口としての機能は、今後期待されるところである。また、⑪「特にいない」との回答者も5人に上った。

### 3.8 仕事の楽しさの有無

次に、現在の仕事が楽しいか、たずねた。その結果について表8で示す。

表 8 仕事の楽しさの有無

項目	人数	割合
①楽しい	24	80.0%
②楽しくない	3	10.0%
③どちらでもない	3	10.0%

回答者のほとんどが、①「楽しい」と回答しているが、②「楽しくない」、③「どちらでもない」と回答した者も、全体の2割に達する。

### 3.9 楽しいと感じる時

次に、どのような時に、楽しいと思うかを自由記述でたずね 24 人から回答を得た。自由記述を論点整理し、表 9 に示す。

表 9 楽しいと感じる時（複数回答可：各回答人数を回答者 24 人で割って計算）

項目	人数	割合
①給料をもらう時	8	33.3%
②職場の人にほめられた時	7	29.2%
③仕事をしている時が楽しい	6	25.0%
④会社の人との会話など	5	20.8%
⑤人の役に立っている	2	8.3%

給料に関する記述が 8 人、職場の人にほめられたことに関する記述が 7 人、仕事そのものやスキルアップに関する記述が 6 人、職場の同僚との会話やチームワーク、忘年会といった関わりについての記述が 5 人、業務をこなすことで人の役に立っているとの記述が 2 人である。

### 3.10 将来の不安や心配

次に、将来の不安や心配について聞き、「不安がある」と回答した 11 人に対して、「不安や心配の理由」についてたずねた。その結果を、表 10 で示す。

表 10 将来の不安や心配（複数回答可：各回答人数を回答者 11 人で割って計算）

	人数	割合
①いまの仕事をつづけていけるか（失業しないか）心配	5	45.5%
②職場で仲のよい人がいなくならないか心配	7	63.7%
③職場で仕事をおしえてくれる人がいなくならないか心配	6	54.5%
④親が亡くなった後の生活が心配	6	54.5%

②「職場の仲のよい人がいなくならないか心配」が最も多く、③「職場で仕事をおしえてくれる人がいなくならないか心配」、④「仕事がなくならないか（失業しないか）心配」、①「いまの仕事をつづけていけるかどうか心配」、と続いている。

## 4 考察

今回の調査は、A 知的障害特別支援学校卒業生を対象とした青年学級（同窓会）出席者に対して実施している。また、学校卒業後、何らかの就労支援機関による訓練機関等を挟むことなく、すぐに一般就労した者がほとんどであることを、まず記しておく。

表 1「年齢構成」、表 2「勤務年数」からは、青年学級に参加する一般就労の A 知的障害特別支援学校卒業生が、比較的若い年齢層であることが分かる。また、60 歳近い参加者がいる等、各年代で参加者がいるものの、36 歳以上からの参加人数の減少が顕著となっていることが分かる。これは、本人の体調面や精神面といった事情の他、本人の余暇活動を後押しする保護者の諸事情が絡んでいることも考えられる。

表 3「産業分類」は、結果での述べているように、あくまで青年学級に参加した A 知的障害特別支援学校卒業生の数値であり、参考までに留めておきたい。

表 4「就職する際の相談相手」では、「学校の先生」が圧倒的に多い。対照的に、「就業・生活支援センター」との関わりがないという結果がある。これは、全国と比較して B 県の「就業・生活支援センター」の立ち上げがやや遅かったことが関係していることが考えられる。ただし、この 10 年程で就業・生活支援センターの運営数が増え、卒業生

のみならず、在校生の関わりも出てきている。将来的に、「学校の先生」の異動等により相談相手に困る事態も想定して、これら民間の就労支援機関や相談窓口とも、学校側が連携を強化する必要があるであろう。

表5「職場への要望」では、「今の仕事をずっと続けたい」との要望が圧倒的に多く、30人中24人を占めた。この結果から、ほとんどの者が現在の職場と自らが携わる業務に対して、一定の愛着を持っているといえるであろう。ただし、「一緒に働く仲間、友だちがほしい」、「仕事ができるように教えてほしい」、「まわりの人に仕事を助けてほしい」、「職場で困ったときに相談できる人がほしい」といった項目への要望が多いことが分かった。これらから、他者との関わり（人間関係）やコミュニケーション面において不足を感じ、もっと関わりが欲しいと望む姿や、仕事や指導を分かりやすく教えてほしい、伝えてほしいと求めている実態が浮かんでくる。

表6「悩みや要望、困り感の内容」では、自由記述の回答として「仕事で分からないことがある」、「仕事を教えてほしい」といった業務遂行上の悩みや要望、「話し相手がほしい」「コミュニケーションがうまく取れない」といった他者との関わり（人間関係）に関する記述が多く見られた。「仕事で分からない、教えてほしい」との回答も、言いかえれば他者との関わりを求め、人間関係上の困り感があることがうかがえる。これらの回答が多数挙げられたことをふまえると、仕事をする意欲は十分にあるものの業務遂行上の理解でつまづいていること、困った時に業務を教えてくれる人や職場で気さくに話ができる相手を求めていること等が考えられる。

これらは、表5の「職場への要望」で示した結果を裏付けるものであり、障害者権利条約における合理的配慮と差別禁止の観点から、本人支援はもちろんこと就労先に対して、支援と環境への配慮の充実を依頼する必要があるだろう。

一方、表7の「悩みや困り事の相談相手」では、「職場で一緒に働いている人」及び「職場の上司」を最も多く挙げており、悩みや困り事など、職場に相談している実態も分かった。これらから、対象者の職場によって、話し相手の有無に差異が生じていると思われる。また、障害者職業センター（ジョブコーチ）や就業・生活支援センター等へ

の相談者がやや少ない他、就業・生活支援センターへの相談者がいない、という結果が出ている。卒業生の悩みや要望、困り感等、学校が先に事情を把握した場合、支援機関との連携により職場における就労者への配慮と支援を共に求め、時に就労者の代弁者となるように、今後よりいっそうの連携推進と強化の必要性を感じる。

表8「仕事の楽しさの有無」では、「楽しい」との回答が8割（24人）であった。さらに、自由記述で寄せられた回答を論点整理し、表9「楽しいと感じる時」にまとめた。ここでは、「給料をもらう時」が最も多く、懸命に仕事をした報酬としての給料で、余暇活動や消費生活を楽しむ生活スタイルが、ほぼ全員に定着しているといえるであろう。また、「職場の人にほめられた時」、「会社の人との会話」といった回答も多く、職場の方に受容してもらい、会話や関わり等のコミュニケーションを増やすことの重要性を感じさせられる。

また、自由記述の内容を細かく示すと、「仕事をする（が楽しい）」「（洗濯物を）たたむのが速くなった」、「職場の忘年会が楽しい」等の回答から、仕事を全うする自分に対する喜びと上司や同僚からほめられたり、笑顔で会話を楽しんだりする際の達成感、成就感、自己肯定感により、「楽しい」と表現していることがうかがえる。

ただし、「楽しくない」との回答も全体の2割（6人）おり、「職場で嫌なことを言われる」、「話す人がいない」といった回答があった。これらの回答を、我々関係者は真摯に受け止めなければならないと、来年4月、我が国において施行される差別解消法とも照らし合わせ、就労者が働くうえでの環境設定の充実を、再度、確認する必要に迫られている。

表10「将来の不安や心配」では、「職場で仲のよい人がいなくなるか心配」が6割を超え、次いで「職場で仕事を教えてくれる人がいなくなるか心配」、が5割を超えている。これらから、職場にあまり多くはないであろう仲良く話せる同僚や上司を失うことに対する恐れ、ほめられることや達成感、充実感の喪失、職場での孤立を恐れていると考察される。これらは、職員の移動や配置換え等により、卒業生がすでに経験をしている「不安や心配」とも考えられ、職場での変化に弱い姿が示されているように

ある。

さらに、「親が亡くなった後の生活が心配」との回答が5割を超え、「今の仕事を続けていけるか（失業しないか）心配」との回答が5割弱となっている。自らの給料で消費生活や余暇生活を楽しむうえで、親の見守りを背景とした家庭生活の安定を求めていることが分かる。また、これまでに自分自身の都合だけでなく、景気の低迷などによる企業の事情で失業し、就労訓練を重ねた後に再就職を果たした卒業生も多数存在している。現在の状況や将来に対する不安な気持ちを友人への連絡や相談などを介して、卒業生同士がお互いに会社や世の中の厳しさを肌で感じ取り、失業を恐れている実態もあることが想定される。

## 5 課題と展望

今回、調査を実施した青年学級の参加は本人の希望であり、ここで聞き取り調査の対象となったA知的障害特別支援学校卒業生は比較的人との関わりやコミュニケーションを積極的に求めるタイプである。したがって、青年学級にあまり参加していない、もしくは全く参加していない一般就労者に関しては、その実態は明らかではない。企業の勤務形態で参加が困難な卒業生もいるが、家庭の諸事情で参加困難なケース、本人の参加意欲が乏しいケース等もある。

これらの卒業生に対する悩みや要望、困り感を探る手立てを講じることが、今後の課題として挙げられる。また、青年学級に参加していないA知的障害特別支援学校卒業生の中に、さらに重要な悩み等を抱えているケースも考えられるため、今後、企業や家庭訪問等による調査実施を検討している。

2014年に我が国において障害者権利条約が批准されたことを受け、障害児者に対する合理的配慮の提供や差別禁止に関する認識は徐々にではあるが高まりつつある。卒業生たちが今後、よりよいキャリアデザインを描くためには、職場環境のよりいっそうの整備は必要不可欠である。職場で懸命に働く卒業生たちは、人としてのつながりや関わり、会話やコミュニケーションを求めている。与えられた業務を全うするため、分かりやすい支援方法やアドバイスを求めている。

「私たち抜きに、私たちのことを決めないで」が表現したように彼ら彼女らの声を拾い上げ、職場に伝え、改善につなげることが、特別支援学校の教師に求められると考ええる。

また、卒業生の悩みや要望、困り感の把握を通して、在学生に対する教育活動や支援方法、保護者への啓発や支援へと還元し、関係機関との共通認識や連携強化につなげることが、今後求められるであろう。

### 【参考資料】

厚生労働省(2008)「障害者雇用実態調査」

謝辞 聞き取り調査にご協力いただいたA知的障害特別支援学校卒業生の皆様および佐竹範子さん(2014年度高知大学卒業生)に感謝申し上げます。